

編集後記

徳島赤十字病院 第一小児科部長 渡 邊 力

「STAP 細胞はあります」この一連の事件は私の科学論文に対する考え方を大いに反省させられるものでした。これまでは論文は雑誌に掲載されればいいとだけ思っておりました。時は論文を重視する時代、とくに impact factor などというものがでてからは、ポストの選考に impact factor の合計点が求められたり、学会の評議員になるのに impact factor 1以上が何編あるのか問われたり、また専門医資格でも論文最低5編が必要という規定があります。臨床で何人の患者さんを助けたかよりも、患者さんを診ずにせつせと論文を書いた医師？が評価される時代でもあります。某大学でも論文に捏造があったという事件もありましたが、これは氷山の一角で、他にも怪しいことはたくさんある気がします。しかし、まだまだ論文重視の時代は続くでしょう。一方では、論文を提出する際に、倫理委員会の承認は、説明同意はとか、利益相反の報告はと面倒なことが増えています。最近では共著者各々の論文に対する貢献度を聞いてくる雑誌もあります。ますます論文が書きづらくなっておりませんが、若い先生方にはどんどん論文を書いていただきたいと思います。まずは症例報告から、稀有な症例は皆に情報を提供すべきです。また、徳島赤十字病院ではこんなことをして、こんな病気をなおしていると宣伝にもなり、自分も高めていきます。症例報告の次は原著といわれる科学的な考案を含めた論文に。さらに英語で書ければ一人前です。

さて、今回徳島赤十字医学雑誌も第21巻を発刊する時期になりました。各科非常がんばっておられ、すばらしい論文が多く感激しています。1812年初刊のマサチューセッツ総合病院の雑誌が、いまや impact factor 50の the New England Journal of Medicine となったように、本医学雑誌も200年後には impact factor がつくような雑誌となることを願ってやみません。